



日本カトリック海外宣教者を支援する会

## 巻頭言

## 大学を卒業した元ストリートキッズ

聖心会 井上 千壽代

聖心会は1991年に、特に貧しい地域の子供たちに、または、ストリートキッズのために、奉仕したいという願いをもってジャカルタに入りました。

当時、ジャカルタ東部のジャティネガラ駅のまわりには、汚いTシャツを着た男の子たちがいっぱいいたむろしていました。イエズス会が、そういう子供たちの面倒を見ていたので、私たちは、アメリカ人2人と私の3人で、ジャカルタの町、特に、貧しい人々の現状を学ぶために、ISJ（インスティテュート・ソシアル・ジャカルタ）に入りました。2人のアメリカ人は、英語のレッスンをスタッフに、私は、ISJのスタッフと共に、ストリートキッズの面倒を見ることになりました。私たちは、この活動を通して、インドネシアの貧しい地域の人々の生活を学び始めました。

12、3人の子供たち（8～17歳）は、地方から稼ぎに来ている男の子たちで、両親を亡くした子、片親の子、2度目のお母さんとうまくいかない子、お金がなくて学校へ行けなくなった子供等でした。彼らは、歌うたいをしたり、新聞を売ったり、物乞いをしたり、たばこを売ったりして、毎日の自分の食費と、わずかでもたまったら、親に届けるという生活です。私たち

## ♥♥もくじ♥♥

巻頭言	1
第71回運営委員会議事録	4
宣教者からのお便り	5
ザメッセージ	10
ECHO	11
こんにちは!お久しぶりです	12
クリスマスカード	13
新入会員・事務局より	14



は、アリさんを中心に、ハンディクラフトを教えてみました。インドネシアの各部族の紙人形でブックマークや、バティックの布で作ったメモ箱や、ファイルケースなどができました。上手にできたものは、ミニバザーや大使館のバザーで売ったり、さらに銀座4丁目の「愛のセール」でも売らせていただきました。作りながらのお喋りの中で、「学校に行きたいなあ」という子もいました。真面目に、正直に仕事をするようになったら、学校に行かせてあげようという共通理解をスタッフの心の中に抱きながら、その時は聞き流していました。

半年位たって、さあ誰が本当に学校へ行きたいか、と聞いてみると、13人のうち5人が希望、ドウル、エディ、マンスール、オペン、ダナンです。そこで、制服、カバン、靴などを用意し、学校の初日に「行ってまいりま〜す」と、元気に出かけました。エディ、ドウル、オペンは、一年生の授業が終わると、一目散に戻ってきて、「もう明日から、行かなくてもいい」と座り込んでいました。どうも、友達とけんかをして、先生に叱られたらしいのです。結局、マンスールは3年生まで、ダナンは1年で、やはりストリートキッズに戻ってしまいました。

1997年来のインドネシアの経済の不況は、この子供たちの生活にも影響してきました。駅前のテントの食堂のごみ箱から、食べ物をあさったりして食べることもありました。そして子供たちは、シンナー遊びに明け暮れるようになってしまいました。

ある朝早く、スタッフのカリヨさんが、「イブイノ(私のこと)、ドウルが死んだよ。速く、速く」と呼びに来ました。病院に行くと、もう白い布に包まれ、横たわっていました。シンナーの影響で、片足であることを侮辱されたと感じたマンスールが、ただチョットと傷つけようと、延髄のあたりを刺してしまい、ドウルはすぐ意識不明になり、神様に召されました。午後、ドウルの両親が到着。マンスールはどこかへ行ってしまいましたが、カリヨは、静かに事のなりゆきを両親に説明しました。後で、ドウルのことを知ったマンスールはびっくり。神父様の指導のおかげで自首し、3人のISJの弁護士のサポートで裁判が始まりました。そして1997年に刑務所の一角に拘留されました。

その後、間もなくISJの弁護士たちは、未成年だったマンスールをISJで責任を持つ条件で仮釈放の依頼をし、叶えられました。いよいよマンスールが仮釈放される日に、「オレは、何を用意しようかな」などとブツブツいっている子がいたので、「なんのため？」と聞くと、「マンスールが出てくるだろ。また、怒ってなにされるかわからないから、チョットと武器を用意しておきたいのさ」え、えっ！とびっくり。「あんたたち、もし、いままでうそついたり、万引きしたり、悪いこと何にもしてなかったらどうぞ。イブイノは、いっぱい人にうそついたから、マンスールと同じよ。兄弟だろ。何にも用意しないよ」。みんな黙ってしまいました。オペンが、「それって、キリストさんの教え？」といったので、私はびっくりし、内心、分かってるんだと喜びを隠しつつ、「そうだよ」と答えました。

マンスールが、仲間と一緒に住むようになって、何回か腹を立ててナイフを手にはしましたが、

マンスール自身自覚し、「イブイノ、このままだと自分でも危ないと思うから、勉強したい」と電話がかかってきました。シメタ！とばかりに、イスラムの寄宿学校（プサントレン）を探して入れていただきました。先生方の寛大な指導には、ただただ感服するばかりでした。

マンスールは、2004年に高校を卒業し、ジャカルタのタントウーラ大学法学部に入学。2年が終わった頃に、チョットしたFAKTA（ISJの後のNGO）のスタッフの言葉に傷つき、FAKTAから出ていくと同時に、大学からも姿を消しました。

ところで、聖心会は、2009年にバンドンで、新しい共同体を始めました。ある日、一人のシスターをバンドンの共同体に送るために、ジャカルタから車でバンドンに行きました。急に「イブイノ、あれマンスールだ!」と、元ストリートキッズの仲間だった運転手のウチョックが見つめました。車を降りてから、ちょうど道端でひと休みしているマンスールの横に座りました。「マンスール、元気？ 久しぶり」と声をかけると、本当に驚いた様子。

マンスールはその後、バンドンには3年程滞在し、すべてを語り合える恋人にも出会いました。しかし、論文を終わらせる時間は、なかなか取れなかったようです。

2018年の初めに、パレンバンの大学で卒業ができるという知らせをもらいました。それまでの経緯が分からないまま、私は、ストリートキッズの十数人のなかで、唯一、大学卒業というその喜びを共にするために、パレンバンまで出かけました。立派に、背広を着たマンスールに出会い、涙と共に抱擁し合いました。式が終わり、簡単な昼ご飯で、2人で卒業を祝いました。かつて、マンスールの編入学を受け入れた学長は、もうすでに神様のもとに召されていたのですが、「マンスールという片足の学生が、戻ってきたら、必ず卒業するように指導をよろしく」という遺言を教授たちに残しておられたようで、当日の黒の背広も、元学長の夫人が、「これは主人のですが、これを着てください」といって、元学長の遺言のことも聞かされました。

マンスールがどれだけ多くの人々の愛情と、支えによって大学の学士号を取れたかは、本人が一番知っていることでしょう。「実は、ヒロという男の子がいるんだ。生まれるとき、イブイノのことをずっと思っていたので、“高広”という日本の名前にしたんだよ。インターネットでみると、高い崇高なものを求めていく、という意味だから」。きっと、これからも、家族とともに崇高なものを求めて生きていくことでしょう。



## □■□ 第71回運営委員会議事録 □■□

日 時：2018年12月8日（土） 15:00～17:00

場 所：六本木・聖ヨゼフ修道院 2階会議室

議 事

### I. 「きずな」145号について

お便りが少なかつたため12ページとなった。

### II. 「きずな」146号について

巻頭言は、インドネシアで活動されているSr.井上千壽代(聖心会)に依頼することになった。

### III. 援助申請審議

1. カンボジアのカンポート共同体のSr.橋本進子(ショファイユの幼きイエズス修道会)から、文化センターの図書館管理費と書籍代、他5つの村の書籍代として計3,000ドル(346,770円)の申請があり、支援を決定した。
2. カンボジアのシェムリアップ共同体のSr.黒岩あつ子(ショファイユの幼きイエズス修道会)から、アランニュー村アンチエ・プレスクール、およびホールでの活動に使用するスピーカーの購入費として569ドル(65,770円)の申請があり、支援を決定した。

### IV. その他

#### 1. パンフレットの件

当会の新しい案内パンフレットについて最終的に意見を交わした。

- ・表紙の当会の名称の上に『あなたときずなを結びたい!』と入れる。
- ・使用した写真の下に国名を入れる。
- ・パンフレットのサイズ：A5の二つ折り

#### 2. 「きずな」発送について

- ・国内便：12/6 瀬田修道院にて発送作業11時半まで。ボランティア14名で3,250通発送。
- ・海外便：12/7 事務局にて発送作業。3名で「きずな」とクリスマスカードを同封して海外143通、その他国内202通、合計345通を発送。

#### 3. 名簿の更新

修道会から新しく送られてきた住所、派遣者の異動をチェック中。

#### 4. 会員名簿、会費の管理

手書きの名簿をデータ化へ進める。

#### 5. 徳田教会10/21のバザーに参加し、売上金の一部15,000円を寄付として受領した。

#### 6. 次回運営委員会は2019年3月16日15時～開催予定。(今後委員会は第3土曜日に、但し12月のみ第2土曜日に開催する)



## 宣教者からのお便り



南アフリカ ◆プレトリア◆

### 9年間の南アフリカでの宣教を終えて

聖霊奉侍布教修道女会 吉田 彰子

この度、9年間のボツワナ・南アフリカでの宣教派遣に少し休息を入れるために、日本管区に戻ってきました。本当に考えもしないことをいろいろ体験させていただいた9年間でした。

宣教者として相手の文化を学び、尊重する姿勢を大切にしたい、と言語の勉強に意欲を持って取り組もうと張り切って行っただけですが、適当な先生が見つからず、数か月で別の共同体に転任また転任で、ボツワナと南アフリカのすべての共同体（6つ）に転居しました。また、授業も1週間に一度、1時間ほどであとは自学。共同体のある場所によって住む部族も違うので、結果的に3つの部族語を勉強しましたが、どれもほとんど中途半端になってしまいました。それでも知っている単語や挨拶を返すだけで、みんなとても喜んでくださいました。

特に初めの3年間は「どうしてこんなに働かないの?」「どうしてこうするの?」「これって常識じゃないの?」など、自分の育った家の、修道院の、国の常識から物事を見て判断して、アフリカの人々の価値観が受け入れられず、戸惑いと、葛藤と、場合によっては怒りなどに振り回されていました。短期間ではなく長期にわたって他の文化圏に生活し、その人々を理解す



るということは、頭ではできると思っていたとしても簡単ではないと本当に実感しました。そのようなことに少しずつ慣れてくると今度は、彼らの文化も認めるけれど「やっぱり日本の文化っていいなあ」と自国に対する誇りとか愛着を感じるようになっていきました。伝統芸能や匠の技を見てその美しさに感嘆したり、日本庭園や建物、田舎の景色など「日本らしいもの」に心落ち着いたり…。それが次の3年間特に強かったように思います。

また、私たちの準管区にはボツワナ、ザンビア、南アフリカで26名ほど会員がいて、14国籍からなっているのです。ということは3～4人の共同体の全員が違う国からの集まり、ということがほとんど。それは国籍の違いだけでなく、年齢、養成、そして何よりも性格の違いからくる物事のとらえ方、考え方や行動の仕方の違いも含むということです。これは豊かさと同時にチャレンジです。

私の場合、結果的にアフリカでの大半は外向きの宣教・使徒職ではなく、修道会・管区のための使徒職である「準管区会計」でした。高校2～3年生で数学が選択になったその時からずっと数学、経理、簿記など何も触れて来なかった私が、5種類の通貨を扱い、英語で総本部とやり取りをし、準管区の名を背負って報告を出す、などという大役を仰せつかった時には、「なぜ私が?!」という疑問と、本当にできるのだろうかという不安で、とにかく一生懸命、誠実に、謙虚に、と努力しました。失敗や恥もたくさん経験。それでも多くの姉妹たちや専門の人たちに支えていただき、信頼を置いていただいたのは、大変大きな力でした。そして何よりも、神様が私に望まれたことを信頼して受け入れたことによって、神様ご自身が助けてくださり、大きく成長させてくださったのです。コリントの信徒への手紙で聖パウロは次のように言っています。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」(Iコリント10:13)。この言葉は聖書を初めて読んだ時から私の心に残っている個所ですが、アフリカ宣教でそれを心底実感することができました。

これからしばらく日本での宣教奉仕になります。特に社会の急激な変化の中で、10年という空白はずいぶん大きいので、適応するのに時間がかかるかもしれません。焦らずに自分の経験と周りの動向を統合しながら、聖霊会の方針に沿った自分らしい宣教活動を展開していけ

たら、と思います。海外宣教者を支援する会の皆様からの温かいご支援に深く感謝するとともに、これからの私の日本での宣教修道生活の上にも神さまの祝福と導きがありますように、お祈りください。また、海外で宣教活動に励んでおられるたくさんの司祭、修道者、信徒の皆様の上にも、聖霊の恵みと導きとご保護がいつもありますように。

マダガスカル ◆アンタナナリボ◆

## 修道院の高齢のシスター

マリアの宣教者フランシスコ修道会 平間 理子

マダガスカルに来て27年目になりましたが、未だにいろいろな問題にぶつかっています。といっても2017年5月から2018年8月初めまで日本に滞在、札幌の病院で手術を受けたりしていました。マダガスカルで椎間板ヘルニアの手術を受けましたが、術後が余りよくなく再手術、さらに下腿に長年できていた潰瘍も皮膚の移植をして、すっかりよくなりました。やはり日本の医療はすごいと感じました。日本ではもうガンも治る時代で、100歳以上の方も多いとのこと。札幌のある教会の神父様は、70、80歳はまだ花ざかりと言っていましたが、本当ですね。

一般にマダガスカルでは70歳は最高年齢です。でも私の修道院のフランス人のシスターは108歳です。全介助ですが、受け答えははっきりしています。そして95歳のマダガスカル人のシスターは、認知症があってもミサ、食事には来て、とても明るくふるまっています。聖堂でも時々鼻歌を歌っています。杖もなく体

を揺らしながら一人で歩いていますが、太りすぎて靴を履いたり靴下を履くのを手伝っています。言葉ははっきりしていて、時々霊的なコンフェランスもしてくれます。以前は看護婦をしていましたが、今は修道院内で皆を楽しませてくれています。年をとっても明るく、他人の悪口など決して言わずにいますので、私共のいいモデルです。

こちらでは11月12日に大統領選挙が行なわれ、1月8日に結果発表がありました。45歳のかつてクーデターを起こした人が選ばれました。少しでも国をよくしてくれるように願っております。今年もよい年でありますように。

ペルー ◆リマ◆

## 会員の異動がありました

イエスのカリタス修道女会 中村英子

いつもお世話になっております。昨年はアントニオ・カヴォリ学園のために多額の支援をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

「きずな」を読ませていただきながら、世界のあちこちで喜びのうちに宣教に励んでおられる皆様の活躍に心躍らせたり、「きずな」を形にし、私たちの手元に届けてくださる方々のご苦勞と愛の奉仕に感謝をささげております。1月に「きずな」No.145が届き、皆に回して隔々まで穴が開くほど読ませていただきました。この数年の間に会員の異動がありましたので、現在ペルーで働いている会員のご報告をさせていただきます。

2019年1月現在 ペルーで働いている日本

人のシスターは以下のとおりです。

管区長 川端キヌエ

田中ミ子、古川厚子、恵 英代、樽角ナツエ、山田初美、川上スエ子、中村千秋、中村英子

年を重ねるごとに足も腰も痛みを増してきましたが、まだまだ頑張ります。これからもどうぞ温かいお心で支えてくださいませ。よろしくお願いいたします。(管区秘書)

ドイツ ◆デュッセルドルフ◆

## 「グッテス ツベック」の精神で

聖パウロ女子修道会 比 護 キクエ

昨年2018年は、ケルン教区に住む私たちカトリック日本人会にとって悲喜こもごもの年でした。「悲」のほうからお話しますと、1980年から38年間、ケルンと、ケルン近郊に住むカトリック日本人会のために多大の尽力をささげてくださった、イエスのカリタス修道女会が修道会を引き上げられたことです。悲しくて胸が詰まる思いでしたが、現在の世界の召命と修道会の事情を考慮すれば、致し方ありません。ただひとつの慰めは、シスター方がまだデュッセルドルフに修道院を持ち、幼稚園教育を通して日本人の方々に、大きな愛と忍耐を持って宣教の証をしておられることです。そして幼稚園のご父兄から、ほとんど毎年、家族ぐるみの受洗者が出ることです。昨年暮れにも、一家5人の方が、丁度ケルン教区ご訪問中の菊地大司教さまより受洗され、みなで喜び合いました。

「喜」の方は、専任の日本人司牧司祭が帰国された後、ドイツ在住の川本神父様が遠路、ケ



ケルンとデュッセルドルフでミサを捧げてくださいましたが、健康上の理由で来られなくなりました。その後任として、長年新潟教区で活動をしていらっしゃるフーベルト神父様（フランシスコ会）が、昨年の暮れにおいでくださったのです。

そして最大の喜びはなんといっても、東京教区の菊地大司教様のご訪問でした。東京教区とケルン教区の結びつきを、ケルン教区で知らない人はいません。戦後すぐに始まった東京教区への支援は現在も続けられていて、2月の最初の日曜日は東京教区の日として、その日の全献金は東京教区へ。白柳枢機卿様が生前度々言われておられた言葉を思い出します。「日本は今も宣教国で、のどから手が出るほど宣教者をほしいのですが、ドイツのケルン教区のフリングス枢機卿様が、世界大戦の敗北で多くの町が廃墟同然となり、その復興のためにドイツでも莫大な費用が必要であるにもかかわらず、同じく敗戦国となって苦しんでいた日本の東京教区への援助を、これこそ主が望まれる兄弟愛です、と申し出られました。これにならい、私たち日本も、私たちより困っている国々に援助の手を差しのべましょう」。このお言葉は、ケルン

教区に住むものとして、思い出すたびに感動させられます。

ケルン教区は、有り余ったお金を日本に寄付したわけではありません。それは次の例でもわかります。私が高校生の時の宗教の時間に、東京の神学校から小林さんという神学生が、ドイツ留学時の体験談を話しに来てくださいました。ドイツの一人のご婦人が援助してくださっておられたので、滞在中にご挨拶かたがたお礼に行かれたそうです。その方は裕福で、大きな家に住んでいらっしゃるに違いないと思っておられたそうです。でも尋ね当てた先はアパートで、通されたお部屋は小さく、電気を節約するためか薄暗く、部屋の隅には、日本ではもう誰も使わなくなっていた白黒のテレビがぼつんと置かれていたそうです。それを見た小林神学生は、頭をが〜んと殴られたような感じだったそうです。彼女は一人の東洋の神学生のために、それこそ聖書に出てくるやもめの献金のように、ご自分の生活をきりつめて節約し、その尊いお金を送ってくれていたのだ、と。

私がドイツへ来て習ったことは、「グッテスツベック（良い意向のために）」という言葉とその行為です。ドイツの教会は、信徒数が減っても、援助金は減らないそうです。ドイツには、ドイツ司教団に属する各種の援助団体が寄付を集める他に、各教会が独自に世界の国や町と姉妹関係を結び、秋になるとこの「グッテスツベック」の目標を掲げて、バザーなどをして寄付を集めたりします。それ以外にも前述のご婦人のように、個人でされる方もそれこそ数え切れないくらいおられます。金銭以外にも、さまざまな形で奉仕活動をされる方もおられ、この



方たち無しにはドイツの教会だけではなく、国家も成り立たないといっても大げさではありません。

「グッテス ツベック」といって、嬉々として奉仕活動に励んでおられるドイツ人を見て、何か出来ることはないかと思いました。神様は私に「手仕事が好き」という恵みをくださっていることに気がつき、何かないかと考えた結果、余暇を利用して姉妹の修道服を縫ったり、東京修道院にいたとき製本所で働いていた経験を生かして、司祭、修道者の教会の祈りの本や、教会の大きな聖書やミサ典書の修理を思いつきました。ボロボロだったさまざまな書物が、ちょっとした修理で見違えるように美しくなった時の喜びはなんともいえません。それ以上に、依頼された方が喜んでくださるのを見ると、その倍以上に嬉しくなり、その方々を通して神様から大きな喜びと恵みをいただいていることに気がつきます。お返しするものは何人も人の能力や才能とは限りません。たった一つの微笑でも、他の人に大きな喜びと希望と慰めをもたらします。大切なのは、いただかなかったものを探して嘆くより、いただいたものを探してそれを感謝のうちに分ち合うこと。これがドイツへ着て33年、私がドイツ人の方々から学んだことです。

アメリカ ◆ニューヨーク◆

## お礼とご報告

メリノール女子修道会 伊藤 照子

海外宣教者を支援する会の皆さま、新年おめでとうございます。いつもきずなを楽しく読ま

せていただいております。筆不精な私、ほとんどお返事を差し上げることがありませんでした。お許してください。私は2015年から、ニューヨークのメリノール修道会本部で、会の指導部の司牧に携わっております。日本管区でのメンバーも入れ替わり立ち代り、変化の多い状況です。とりあえず、天国に召されたシスター方の報告だけでもと思いたちました。

ここ本部修道院で余生を過ごされていたシスター中山相子は2015年に、シスター大藪愛子とシスター久慈泰子は昨年2018年に、天国に召されました。現在、ニューヨーク本部修道院にいるのは、シスター合原節子と私の2名です。

私共のミッションは、海外宣教を中心に形成されていますが、「きずな」に書かれている宣教者の皆様とは、地理的に距離があるようです。それでも、同じ地域で日本人の宣教者が働いておられるのを知ることだけでも、連帯感が伝わってきます。今年も「きずな」を通して、いろいろな宣教者の方と繋がりが持てるのを楽しみにしています。

まずはお礼とご報告まで。事務局の皆様には神様の豊かな祝福がありますよう祈っています。

カンボジア ◆コンボンルアン◆

## 水上村の子供たちが減りました

JLMM (信徒宣教者会) 井手 司

日本に帰って治療をした結果、順調に回復しました。カンボジアで痛めた腰と右膝の診断は、右膝靭帯損傷、右膝関節炎、筋膜性腰痛とのことでしたが、手術はせず痛みを取ってから、リ

ハビリとストレッチを続けました。ストレッチは重要です。かつて水上村で腰痛に苦しんでいる人が多いので、ドクターにストレッチの方法を覚えてもらいましたが、人々はストレッチを覚えてもらうより、痛み止めの薬をもらう方がうれしいとのことでした。

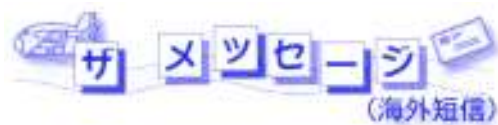
1か月半ぶりに帰ってきたら、教会の学校に通ってくる子供たちの数が減っていました。先生は「今は漁が忙しい時期なので、手伝いのため来られない。また、今年はベトナムへの移住を考えている人が多い。移住するならクメール語の学習は必要なくなり、学校に来る子どもが減っている」と言っていました。今は乾期で大規模な漁が解禁になり、人手が必要になります。子供が学校に行かず、家の仕事を手伝う家庭が多いです。



勉強をする子供たち

ベトナム移住を考えて、準備している人はこれまでもいました。水上村の人はベトナム籍もカンボジア籍も所持していないため、厳しい生活を送っています。ベトナム、カンボジア両政府は、国籍を持たないベトナム人はベトナムへ帰るか、カンボジアに残るためにはカンボジア国籍を取得するよう指示しています。ある20代の青年はこう言っています。私は水上村生まれで、カンボジアの中学を卒業することができた。両親はベトナムから来て、クメール語も出来ないのでベトナムへ戻ることを考えている。ベトナムには親戚も少ないので、カンボジアに残りたいとの希望。そのため最近は何度も話し合いをしているが、結論が出ていません。

また教会でも、教会委員のメンバーがベトナムへ移住しました。この家族にはごミサをはじめいろいろ助けてもらったので、とても寂しかったです。カンボジアに来て5年が経ちますが、その間に教会関係者がベトナムに移住されています。ごミサに参加される人も減って寂しくなっています。人数は減っても、学校に来る子供たちや教会に来る信者さんのために、私にできることを行なっていきたいです。



**\*ブラジル サンパウロ**

イエスのカリタス修道女会 白沢康子

心からの感謝をこめながら、私共宣教者の気持ちをお伝えいたします。いつもお忘れなく、送付してくださる「カトリック生活」、「心の灯」は、よき霊的かてとなっていますし、さらに福

音宣教の大切な資料となっております。皆様からのご支援に応じて新しい年も、一人でも多くの人々に、神のみ言葉の使者となれますようにお祈りください。聖母マリアの御祝福が皆様の上にありますように。

**\*フィリピン マニラ**

お告げのフランシスコ姉妹会 白石幸子

リヴェリザの通りに出ると「給食ある？」と子供が聞いてきます。一品料理だけれど子供たち

にとっては待ちに待った楽しい時間。調理スタッフやリーダーの協力で、通年 350～500 の給食を続けています。また「遊びのへや」は 2 時間、週 5 日開かれ、赤ちゃん、幼児、小学生がスタッフに見守られて遊んでいます。機会がありましたら、マニラにもお越しください。

**\* フランス パリ**

聖ピンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会 毛利紀子

これまでいろいろなお知らせなどありがとうございました。この度帰国しまして、神戸の修道院に住所が変わりましたので、よろしくお願いたします。

**\* ハイチ**

レデンプトリスチン修道会 飯村美紀子

先日、「きずな」142号と144号が同時に到着しました。待ってましたとばかり、巻頭言から読み始めました。種々異なる国に派遣されて活動なさっておられる方々の報告は、本当に大きな励みとなっております。毎号の到着を楽しみにしております。今年も私共のためにご奉仕くださる皆様に感謝し、主の豊かなお恵がありますようお祈りいたしております。

**\* ドイツ ケルン**

イエスのカリタス修道女会 上村清香

長い間「きずな」を通して皆様に心強いご支援をいただいておりますことを深く感謝いたします。当会のケルン修道院は 2018 年 12 月をもって閉鎖することになりました事をご報告させていただきます。これに伴い帰国する会員は上村清香、今村トセ、竹山ツヤ子の 3 名、デュッセルドルフ市で継続して使徒職に携わる会員は、黒崎順子、谷口エミ子、伊東定美、大曾 希、道下絹江の 5 名です。ご支援くださった皆様の活

動の上に、神様と聖母のお恵みとお導きが末永くありますように心よりお祈り申し上げます。



● 梶川神父様のご遺志が続けられていることに感謝です。運営委員の皆様ありがとうございます。前号の巻頭言のシスター中村は、サレジオ会のアンブレジオ神父様の日本語の先生だったそうです。 (東京都世田谷区 山羽啓子)

● いつも「きずな」をお送りくださりありがとうございます。かつて運営委員だった吉岡道子の妹です。生前いろいろお世話になりました。悲しみの中、姉との思い出を大切に生きていきたいと思っております。 (東京都国分寺市 島田昌子)

● 宣教者の皆様の活動に感謝しております。

(福岡市中央区 遠山 満)

● いつも「きずな」をありがとうございます。今年度分(1～12月)の会費をお送りいたします。

(宮崎県都城市 木嶋えつ子)

● 新しい年を迎えて世界平和を願い、海外宣教者の上に神様の豊かなお恵みがありますよう、お祈りいたします。 (東京都狛江市 嶋田淳子)

● フィリピンのアジア超管区養成の家で養成チームのメンバーとして 4 年ほど過ごしてまいりましたが、高齢のため帰国し、松戸の共同体におります。いつも海を越えて「きずな」をお送りくださりありがとうございました。皆様の熱意と広い心が伝わってまいります。困難な環境で、惜しみなく献身しておられる宣教者の方々のお便りに感動いたします。主が宣教者の皆様、支援する会の皆様を豊かに祝福し、危険と悪からお守りくださいますように。

(千葉県松戸市 愛徳カルメル修道会 和田徳子)



# 海外から届いたクリスマスカード



## 新入会員 (敬称略)

個人会員 7名

秋田 憲子 (北海道岩見沢市) 田谷 千恵子 (台湾・台北市) 早川 治彦 (愛知県あま市)  
榎園 百合子 (東京都目黒区) 栗林 勝彦 (東京都世田谷区) 清水 治美 (岐阜県岐阜市)  
小野 孝 (東京都練馬区)

### 事務局より

- \* 今年の復活祭は4月21日で大変遅い日程ですが、皆様良いご復活祭をお迎えください。
- \* 家の片隅に未使用の切手や書き損じのはがきなどはございませんか？事務局で集めておりますのでぜひお送りください。通信費の一部として大切に使用させていただきます。
- \* 当会の新しいパンフレットが間もなく完成いたします。パンフレットを置かせていただける教会がございましたらお知らせください。ご協力をお待ちしております。またお入り用の方は事務局へご連絡ください。

### 編集後記

- ◇ 日本の今冬はやはり暖冬でしょうか。毎年屋内に取り込む植木鉢が、軒下で越冬できましたから。宣教地では雨期や乾期の気象変動も伝えられていますが、異常気象などについてもお便りをお寄せください。
- ◇ 日本も世界も情報に溢れた社会、振り回されたくないと思うのは年のせい？ですね。3月6日は「灰の水曜日」、そして四旬節。心静かに自分を見つめ、情報社会の喧騒から距離を置いてみるのはいかがでしょうか。(す)

発行：日本カトリック海外宣教者を支援する会

会長 M. マタタ

〒106-0032 東京都港区六本木4-2-39

Tel. 03-5770-8753 Fax. 03-5770-8754

e-mail kaigai-senkyo@cronos.ocn.ne.jp URL <http://www.kaigai-senkyo.jp>

・銀行振替口座 みずほ銀行高田馬場支店 普通 2084112

日本カトリック海外宣教者を支援する会

・郵便振替口座 00140-5-67881 海外宣教者を支援する会